苟記

五上

土岐文庫
文庫17
W45
9

寄贈 昭和六十年二月一日 赤堀善唐氏寄贈
文庫 17 W45 9
新宮之印
0101851451118

万葉考別記五

○宇多手　于稲于稲志（ウタウタシ）　轉名

巻五（今ノ十一）何時奈毛（イツト）不戀有登者（コヒズアリトハ）雖有（アラネド）得田呂比來（モ）……愈之繁母○別巻人万呂哥集之若月清（ユフツキノ）不見雲隠（ミモミエズクモガクレ）見欲（ミマクホシキ）宇多手比日○巻七（今ノ十）譬喩哥吾屋前之毛桃之下尓月夜指下心吉菟楯頃者○巻十六荒城田乃子師田乃稲乎倉尓擧藏阿奈于稲于稲志吾戀良久者まづこの倉に屯倉（ミクラ）などへ稲を幾万束も積重ねおくよし想てうるへし
とりえまで此事を思ひて物の蹟しきまづ重なるをいふさてうた宇
多とゝしうて云を略きて宇多とも志とも宇多ともいふのこと

いい又約束〜く宇多豆ともいへり。うゝしのたゝを約まびちといふ成をでよ結びてうゝてといへり。かく

て右の若月云云ハ見まく欲しけ〜さの略まわく欲しけ〜し。何時奈

毛云〜ハいつ〜もの意の事わわ〜をいひ。毛桃の下よ月夜指さ

さ。おもゝ〜ろきて〜さけ事わ〜を聖さう〜。思ふ〜ぞく妹が

なよし来〜時など仏うわ〜さの略わ〜をいへり。かく〜記よ。

須佐能男命の悪事（サガキ）云〜と。天照大御神ハよろ〜〜詔（りたまふみことも）雖直

猶其悪事不止而轉（ナホソノサガナキコトヤミ五ハデウタテアリ）といへり。けだしハ左〜ても此（タ）ても悪事わ〜

事わ〜をりて。かゝ文よ結然れ。古今集に。うゝねよてハ

まろびねのすゝ〜しけまろぶをう〜とりみぞ世言け始なわ〜る。

是よ結ち〜翌ハ。然る附右よまろば〜左ふ〜ら〜しと

同じきて人意よわ。右けわく物の略わよ事わ〜るもいひ。又略わ

〜ひやわ〜かな〜事〜もいひ〜ふ〜わ。同じ記よ。大初瀬王（雄略天皇）忍

歯王を率て近江よ御狩〜給ふ附。思歯王いまぶ略せ〜ぬよ

馬よ乗ち〜〜大初瀬王の清假屋へおそ〜〜清供人よ。よく出

ま〜ま人とせ〜の〜ま〜いく。やゞて馬をとゝめて出せさてせ〜と。

大初瀬王の清所人ら。宇多豆物云王子慎（モノイミコマシミ）ろべ〜とせわ。こハ

まゞ曙（アケ）ぬよ急き給ふ人を略ろ〜〜もて〜。浸の物語ぶ〜ふ。或ハ

事けを雪わ過歌を略わ〜〜さて〜。素の所よいろ昔古へまれ〜

うゝて〜〜〜〜を略きて〜〜〜〜きと

り。

事ハ後学ふ出ても

上つ世の云なゝも

ふ。上つ世の文ふ出

なゝ〜〜ゝも。特ど

ま〜〜〜後の言をさ

うのゝ〜せていふ

もろわ。

い云れハ即左よ

ゝ〜〜世よ〜つ

〜〜ても略ど特

ゝ〜〜わ〜〜を

かられく事〜〜事。

に付る也。

新撰万葉集なる
て匂ひのうつるそを
別指とせしにや
ともと解にハ阿る此
ともかひちましの
意をとらへぬる。

古今哥集に。散と見てあるべき物を。梅の花うたて匂ひの袖
にとまれる。これハおやかしれ難しき許りて。又花と見こそ
きらんとをれバ。女商恩うて匂ふさまの宛に見るを只。
とろそよ内ふみに当えとかふ主手おわらんとするに。さそふんきば
花にハあらじ。左れど。此されど。其名のごとく女ごころなれ。
ゆりうちなわ。

○梓弓末中三伏一起不通有之（スヱナカタメテコズアリシ／タユタリ）

巻三（今ノ十三）に。根毛一伏三向疑呂尓。巻七（今ノ千）に。暮三伏向夜（ユフヅクヨ）。などあるハ相
似たる書體なれど。おのおの各異なる事。其巻の考に云てて

のおもかげ。此前後に。梓弓引見ゆるべく思見てとも。引
見疑見縁西鬼乎（ヨリニシモノヲ）とも。上寒に。梓弓引見ゆるべく。不来ハ不来
云云。ともいふに同じ意なる言乃かへれるのミ也。かくて末中
とみて末を思ひ。又立かへり中比をも試る也。三伏一起ハかの末
中とおもひ止てハ又思ひ起るをいふ。次下ハその思ひ止まるが
又起りて今通ひ来るを。女のよろこびてこずゑし君ハ
逢めとにかくれ三伏一起ハ弓みる婚まちる紛（ワザ）まく。下乃梓
弓もやちくも。法く弓れたてかくもといひ。今昔物語に弓
たをして之事あるも是にて。射礼の一つなるを以て移せしに

後の物語ふさよ忍ぶうしうおぼす。とりふも見ゆ同じ。されど古へハかゝるしとめづらしといへり

てくもらたむしハ始め三度ちいさく起伏して的をゐんさて矢をかけて高く打起なさん且たかそてふ言ハ袖をたをとめしちんとするよわ出く事をよく絛試るふもいへわ。巻六(今ノ七)よをさぎ(兎)術うまわといふも。たわふの畧なるく此言れ嘉よかなへわ。平云よたわりもうしつといふも。此ら与わ出しと知ゆ。

○意具美(コヽログミ)　心具之　目具之

此巻よ。淺茅原茅生尓足踏(アシフミ)。意具美(コヽログミ)吾念兒等之家當見津。こそふゐうしくおもひしてふ言をうるしの言を畧ゐといへわ。○巻十七よ。長歌よ。處女らぶこそをいひて。春野よ遊ふ君待とうら悲。なわ巳許呂具志。

後よハかゝるしとのみといへり。

いざなよゆかん云々。同巻よ。長歌妹も吾もんハ同じたぐへれど。いやなつかしく相見と常初花よ。情具之眼具之毛奈之尓(コヽログシメグシモナシニ)云々。これもん君しく思ふ事もなくなへて若しと思ふもなしとふ之。○巻十(今ノ九)。筑波山のかゞひの歌。他妻よ吾毛交牟。吾妻よ他も言問。云々。今日耳ハ目串毛勿見(メグシモナミソ)ふも右よ均し。○巻十二(今ノ八)情具伎物よぞなふる。春霞棚引時よ。戀の繁者(シゲキハ)。巻十三(今ノ四)。情(コヽロ)八十一(ク、)所念可聞。春霞輕引時二。事之通者。此二首ゟもていへれ。おぼつかなき事のみ思ふハくるしかりぬ。二ハ遠く居ぶるをく。わぼつかなきおもて若しされば。ゑをもて言とせしく。右乃

眼具之といつるよ。おぞつうちをき素とちもく知べし。○巻
四よ。人毛無古郷尓有人乎。人を自云。愍久也君之憑尓令死てみハまづ
めぐしとりつゝ上をわとをめぐしと思ふるうをきをき妻子
なぐよつけをいつをけあをを事をへよをていつわさくしを素を
今人のむぐくやなどいつを回じめぐしもむぐくも青通ひて
同言ちしがこ且そのむぐをといつを常こ他の上ふも我上ふも
りつがめし。
○神のめぐこ君がめぐこといつも即是ふをこを御ふふも
御回るも常ふ人を苦しとおぶすをいつわ。神代紀よ。憐

後世雨のめぐこ意のめぐこをくいつ。
ほくこの言ふを雅言ちるべし。

愛の字を米具志登於凡須とよみ。右のこをよ愍字をまこ
るもおをを。
○於能礼故所罵而云云哥
右の哥左乃注よ。右一首平郡文屋朝臣益人。傳云昔聞紀皇
女竊嫁高安王。被責時御作此哥。但高安王左降任之伊與國
也。といつわ。思ふよかくを多さ方の中をたまくうるを侍をいつ
ぬをるもかるべ。凡よをさるべを事を附しなるん。古今方集
あどに似つるをきを古注をも皆附をへるをなる歟。

万葉考別記六

○佐恵佐恵　佐和佐和　曾和恵
又佐夜佐夜

此枝よ。安利伎奴乃。佐恵佐恵之豆美。ゝゝハ衣よ著ふる多ん
玉の立居もしハ相顧ゝさわぎゆるを。遠く旅立別まよ家の
内妻を始めゝ遠くゝ居ゝるゝ冠辞之ゝ佐恵佐恵乃
言ゝ記よ。尾翼鱸（ヲヒレスヾキ）佐々和々（サワニ）迩控依騰（ヒキヨサゲテ）而てふハ鱸をつりあぐる
時よさゝゝぐをの。又雄波天皇
大御哥。許久波母知宇知斯意保泥佐々
和々亦。とよま物の。も。鍬もゝ多の人ゝ大根を打ほゝ時乃
騒ゝさよ聳ゝ。后の山背へおゝゝを向ゝ驚佐和ぎまひゝ

幸ませし事をのゝもまへわ。さてこゝふ佐恵佐恵とゝ又同云
を巻十三(今ノ四)も挙しゝ。佐藍佐謂沈(井井)とき。右よゝ引ゝ記ふハ。佐和
佐和ときしハ共ゝ和為宇恵於の音を通ハせしゝ。ゆゑ假字も
意もおかちへわ。うしれば同巻(今ノ十四)のまゝ。麻都我宇良尓。曾和恵宇
良太知(ダ)。麻比等其等(ゴト)。まゝ。和伎毛古尓。安我古非思奈婆。曾和
恵可毛。加米尓於保世牟。てゝも。皆人の強ふるゝをいひ
ゝ同言なゝを。曾和恵とゝ云ハ。ゆゑ。ゝかゝて記ふゝ佐和ゝ
ゝ。寒の上ゝハ佐恵ゝゝ。次ゝハ曾和恵とゝ。皆同言なゝを知る
時ハ。佐和ゝゝハ本言のゝをいひ。曾和恵の恵ハ辭とゝ。

記の御剣のハ。[illegible]
[illegible]ハ。[illegible]
本のゝ又ゝ人ハ疑ふ
べし。且剣の事も緒
説ゝハゝゝ。

今九
巻十ふ。高島之阿渡
河波者。驟(ハヤキ)ゝ者家

然まハ佐恵ゝゝハ和を畧さて恵といひしゝ。且其恵とハ辭
とゝゝゝハ。記ふ。神武曾婆能微能須久那祁久表許紀志絶斐恵
泥とあまハ。ゝゝ狐撥の木乃ゝれちいさきをもこきおろし
枝葉をもおちへわ。ゝゝのまゝを。此ハ恵の約倍なれば
おちへとゝ云ふゝ。然ればゝの恵も先ふ特ゝて曾和めゝ
云ゝゝをべし。又集中ふ。縦恵(ヨシエ)八師(ヤシ)。とゝ云ふ恵と
しゝを添云なれば。恵を助辭ゝもおゝわ。け二つ行れふゝゝも
閑ゆゑし。

○又記ふ。吉野の國栖ゞ大雀命の御剣をほめまゝ云。布由紀能須加良賀志多紀能佐

思宿加奈之弥てふ
ものハ人万呂の哥にて
つしたる物とゝゆ
るに駿の字とまし
を以てかの丸と伝れ
ども例と紀ハ兎
佐和のゝなかる事
考ふ挙しものゝ
と合せて定るべ

夜佐衣同記由良能斗能斗那加能伊久理尓海中の石布礼多都
那豆能紀能佐夜佐夜てゝ上ハ御剣の鞘尻の玉乃お觸て鳴
音を以て佐邪々々といわ上ふ挙て軽く皆佐恵の假字な
る其本ハ玉なれど是ハ騒ぐ形ふ元尻ふ言も假字も異なわ
騒ぐハ巻二の人万呂哥ふ すゝのたハ三山も清ふ礼ともとゝ上れ清
き篠の音ゝ次ふ礼ともとゝ上ハ其形をゝ上れハ假字別なる
ゝ事ハ意ふるめわ上ふ挙ゝ鱸と大根も共ふ騒ぐ形なる
をむゝ知るべし古人ハかゝ表ゝ假字をかてわ

○宇家良我波奈　志乃愛須寸

うけらの事ハ考ふいへわ上ハ芽ふ出る三首ふ一首ハうけら
ぶ花の花ふ豆奈ゆめうゝが花の色ふ出ずあゝんとよゝし
をいゝゝ山ゝ花ふ合て紅けれ拍といふ伝いわかく
相ふいひつゝ出ハ色ふ出といふをゝ出てなうれとゝいゝ
あわ上歌ハ巻十ふ石上振乃早田乃穂尓波不出心中尓恋
流此日巻七ふ吾妹兒尓相坂山之皮為酢寸穂庭開不出恋
渡鴨てゝ多うれど皆ほふ出るものを挙ふ穂ふ穂ハ不
出といひ下せる古哥の表ゝ皮ずゝを強志のぢゝきと例
ゝ志のぢゝ紅ハ穂ふ出ぬものなゝ表ふかゝよわといふ

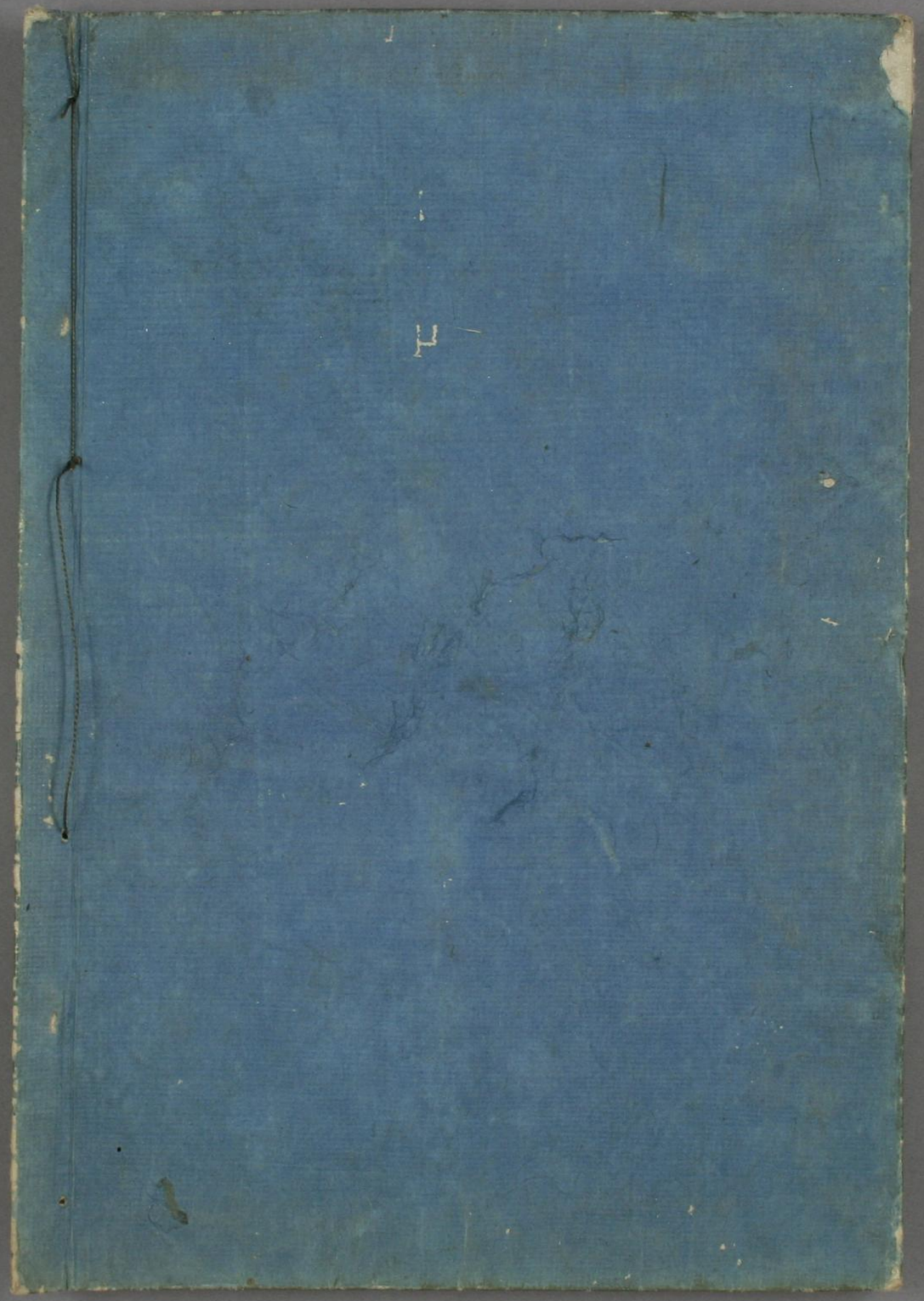
ことを事とすれば。是を志のいちじるしき意につづけたる。右の
あるは早田などをもて志の継にとりなしたるを知るべし。
○右に挙たる仮字の事もわかれば。先一つ手にいふ。おのづから
かに出たるものを挙て。かに出ず。毛に出ずと云下せる例多の
ぬし。二つにハ皮に作るを志のし例とぶちまさるく。三つにハ
志のてふ言ハ志きかなる事をいふなり。由ゆ所を志の作といふが
ぬくいすこさハ葉も志る人ほもなびけば志乃とるなる集中
に多かり。是をかに出ぬすれども思ひハ色をさきといひて
冬も霜をおしはかりにいへるものぞ。然も秋ハ志のうも大

きなるほ出をみなに出ぬをときハ天下に安をやにつるそし
ぎ巻七に（今ノ十）秋相聞と標して皆娘の歌の中に寄花と題
て。茅子女郎花朝皃をきなど多き中に栽しか娘ほに
出こすれちなる事明らかなるを。本集をもつて一偽
たるなれば。いみも多かれど煩らはしくて止ぬ。猶かるこ
多し。其本を極めてバとみい人に庭よ。

○子水葱　大伴駿河万呂哥

水葱に大小あれば巻ふ。奈波之呂乃。古奈伎我波奈乎。伎奴尓
須里。奈流留麻尓末仁。安是可加奈思家。てふハ水葱の事をいひさて

小なるさは田などよ生。大なるは沼澤などに花は共よ紫なり。ふ
さきは五月より六七月まで。大さは五六月より七八月まで
はなは葉は大さ五六寸賀茂山の葵に似て。しきりもも大
きく厚く青黒し。花は紫色。莖は空(ウツ)なり。葱のめし。原ふ
水葱といふ。小さきは花淺紫なり。莖細く葉いとひさく細め
なり。きべなどの様もちがの木に葉に似たり。苗代のこなだ
とよ見ふ。是苗代にはえるなり。三月種蒔より五月
植るまでよ云なり。さて小なるはつみくよりは茶筅て苗とる時
えわ挽などもわ。さくこは延喜式の供奉に雜菜の中に

又古へ苗しろ田よりさきさへと植ずていとまわしせば小なるぎ生ぎわてを成よ反秋なりてもよろしきよもべし。

水葱 准昇五六七八月 和名抄よ。水葱穀水菜可食也。奈木。巻十六よ水葱乃
煮物と云なり。古へ食らはとせしよ式よ朱雀大道の溝よ生たり
蓮水葱芹を生ぎべしよ定あるも食らはみ料まくつ蓮水
葱はふのうらしくもあれどくが生ば後の人乃あはひと
いふまで即はとのくをさ年ごろ是を夏の月よ採うつ年
してえひめたいとよ味は莖立よりはあつくみ葱より
は淡し香もなく毒もなし。